

# 繭

創刊号

Vol. 1, No. 1  
SUMMER '62

---

繭の会発行

Vol. 1 No. 1

繭・創刊号

批評について

高橋邦彦 2

奇跡

西村孝次 6

僕の詩

田中克己 10

ある疑念

宮崎孝一 11

道元・リルケ・ベルグソン

岡崎康一 12

室生犀星

富永次郎 18

輝く幻影の彼方

村上禎 24

夕暮電車

平田穂生 42

塔への旅

大林宣彦 52

題字

高橋錦吉

カット・レイアウト

福沢一也

むかしは美しいものを書かうと思った。この世にないものでも想像で造れると思った。そのうちにこの世に腹が立って来て、僕はすいぶん悪体をついた。皮肉もいった。そのころの詩をとり出してみる気もしないが、数十篇、数百篇とあるやうに思ふ。いまでは想像力も衰へた。この世の視力と想像力が平行して衰へる。これを僕自身は、いや僕をみる他人も「老」と考へてゐる。しかしこの老のなかへある日、「神」が降りて来られた。僕はまづ聖霊にとりつかれ、その次に神を視、最後に神とこの衰へた、老いた僕との間に仲介をなすものを知った。誰が教へたことでもない。僕の中の詩が聖霊をとらへたのだ。僕の詩はだからもうほかのことをうたはない。たえずひとりでこのやうに、うたつてゐる。それを活字にする必要はあるだろうか。ともかくいはずにをれないことを書いておく。これが詩でないとしても、僕はそれをとらへ、それにとらへられたのだ。

僕の時 田中克己

詩人や小説家は、推敲に推敲を重ねてその作品を完成し、世間に発表する。しかし、読者が作者の意図した通りにその作品を理解してくれるという保証はどこにもない。勿論、大まかに言えば作者の意図は読者に伝わるであらうが、一言一句の端まで、あるいはイメージの流れのリズムまでが、作者の意図通りに伝わるものとは言い切れないであらう。その上困ったことには、読者がどう受け取ったかを知る手だては作家にはほとんどない

のである。勿論、仲間同士の批評とか、ジャーナリズムに現われる書評その他はある。しかし、人はめったに思った通りのことを言おうとはしないし、たとえ言おうとしても、すべてを正確に語りつくせるものではない。

そこで作家は、確証は得られないままに、自分の意図を最もよく読者に伝えるであらうと思われる表現を選びながら作品を書き進めることになる。しかし、イメージが先にあって作品を書く作者と、作品を読んでイメージを描く読者とは、逆の作業を行なっているわけであって、作者が読者の立ち場に立って自作を挑めるなどということは実際問題としては不可能である。読者が作者と全く同じ心情の持ち主だとしてもこのことは言えるが、事実においては読者は千差万別の経験、情感を持つているのだから、そのおのおのの読者の立ち場から作品の与える反応を考へることなど、一人の作家にできるものではない。

「われわれは、他人の心中の要求をつかもうとする時、はじめて、同じ星を見、同じ太陽に温められている人間同士がいかに理解し難く、不安定な、ぼんやりしたものであるかを感じる。孤独こそ人間存在の動かすべからざる、絶対的な条件なのであらう」と書いたのはジョウゼフ・コンラッドであるが、この言葉は、作家と読者との関係にもそのまま当てはまるであらう。

しかし、この言葉を吐いたコンラッドが、なおも小説を書き続けたという事実を忘れることはできない。結局、作家には、あるいは人間には、理解される、されないの顧慮を超えた、表現への抑え難い欲求があるのだという平凡な結論に導かれることになる。

ある疑念 宮崎孝一

爾  
創刊号

■  
編集発行人  
爾の会

東京都杉並区大宮町1466 高橋方

■  
発行所

表現科学研究所

東京都渋谷区千駄ヶ谷5の16

Tel. (341)0220・0221・0222・0223

■  
頒価 200円